

一般社団法人西新井法人会会長賞

「未来への寄付」

足立区立 第四中学校

三年 鈴木 廉人

中学校生活をあと数ヶ月で終える僕は、高校に入学したらバイトをし、自分が使うお金は自分で稼いでいこうと、よく親と職業について話をしていた。その時によく出てきた語が「所得税」である。親は、この税金で自分の給料が減ってしまうとよく嘆いていた。そのため、お金を稼ごうとしていた僕は税についてマイナスのイメージをもっていた。

そこで所得税の行方について調べてみると年金給付費や医療費、介護費などに使われていることがわかり、この3つの費用から頭に浮かんだのは去年の夏休みに亡くなった曾祖母のことであった。曾祖母は亡くなるまで、介護医療院に身を寄せていた。目はあまり開くことはなく、手は震えていて、苦しそうでつらそうで、僕はすごく悲しかったが、まだ生きてくれている、頑張ってくれていると思うとほんの少し安心する自分がいた。生きていてよかったと思えるように、頑張りたいと思えるように何度も訪問し、応援し続けた。時には思い出話もした。最後はコロナ禍ではあったが、病院の方々もできる限り僕たちに寄り添ってくれて、いい形でお別れすることができた。思い返すと病院へ入院する前は、デイサービスを利用し、歩くことが大変になってきた頃は歩行器や介護ベッドなどをレンタルしていた。これらの福祉用具や医療サービスは、日本中の

大人が働き、納めてくれた税が一部使われている。税が医療機関や交通機関、教育機関などに使われることは学んでいたが、こんなにも身近にあるとは思いもしなかった。そして、身近な税を見つげようと意識しながらいつも通りの一日を過ごしてみると、生活に欠かせない水、年配の方や怪我人が使う車椅子、学校の教科書や椅子、警察官や消防隊など上げても上げきれないほど隅々まで税で溢れていた。逆に関わっていないものの方が少ないように感じた。

ニュースでは、所得税の増税についてマイナスなことのようによく放送されている。しかし、僕はプラスなことのように感じた。なぜなら増税は社会情勢が不安定な証拠で、それを安定させるための政策だからだ。また、社会情勢を安定させれば、僕達に安心感が生まれ、良い影響が返ってくる。税は未来への寄付のようなものだ。収入から引かれた税はなくなつたのではなく、公共施設や目には見えないものに作り変えられているのだ。それらは自分たちでは実現できないような、納めた税以上の価値になるように感じた。

今までは大人達が頑張って納めてくれた努力の税に支えられていたが、あと数ヶ月で僕も納める年齢になる。今まで支えてくれた日本中の大人達を次は自分達が支えていく番だ。僕は仕事へのやりがいを見つけられた気がした。